

【原著論文】

新体操の採点規則批判
—柔軟性に関する内容を中心に—

浦谷郁子

体育原理研究室

Criticism against scoring rules for rhythmic sportive gymnastics
—Focusing on physical flexibility—

Ikuko URATANI

Abstract: The author published her book titled “Discussion about the Theory of Beauty of Rhythmic sportive gymnastics—Concerning the Relationship with Scoring Rules—.” It was confirmed that a “story nature” is important in a sport of rhythmic sportive gymnastics, which means that “it is characterized by the idea of the theme with a message consistent from beginning to end of the performance” as stipulated in the rule²⁾.

From the above, it can be recognized that pursuing beauty is the most basic factor in it. However, from its reality, it is not too much to say that this point has almost been neglected. The author considers that the reason is caused by its high-level orientation. Specifically, it is caused by the relationship between excessive flexibility and difficulty judgment.

This paper is meant to clarify the above issues and philosophically discuss how rhythmic sportive gymnastics should be.

As a result of discussion, rhythmic sportive gymnastic should not deviate from what it should be. It is clear that the excessive flexibility in question at present, in particular, is not what it should be.

Rhythmic sportive gymnastic is a sport and a culture. Therefore, it is one of the sports which help people live meaningful lives. This is quite natural in the historical origin of sports. Therefore, if it is not meant to help people live good lives, it makes no sense at all.

From the above, it is most important that the forms considered beautiful should be cited in the scoring rules as the factors of the degrees of difficulty. In other words, the degrees of difficulty should be confined within a range in which people feel good doing it. More specifically, the leg opening degree should be confined within 180°. Furthermore, judgment should be made based upon perfect knowledge of form, and should never be ambiguous.

(Received: November 7, 2011 Accepted: February 17, 2012)

Key words: rhythmic gymnastic, scoring rules, difficulty level and flexibility

キーワード：新体操, 採点規則, 難度, 柔軟

1. 緒 言

1) 問題の所在と本論のねらい

筆者は、「新体操における美の理論に関する一考察—採点規則との関係において—」と題して拙著¹⁾を世に問うた。そこでは、新体操というスポーツに「物語性」が重要であるということが確認された。その意味は、採点規則集で謳われているように「演技の始め

から終りまで一貫したメッセージにより実施される主題となるべきアイデアによって特徴づけられるもの²⁾である。

この物語性は、新体操において美を追求していく最も基本的な事柄であると認識できる。しかし、新体操の現実を眺めるとそのことはほぼ蔑ろにされているといっても過言ではない。その理由を筆者は新体操の高難度志向によるものと考えている。具体的には、過度

な柔軟と難度判定の關係にその原因があるということである。例えば、本論で示す柔軟の可動範囲は後屈でいうと頭が背中などを触れることはもちろん、それ以上に反ることが求められている。また、開脚については180°開くことが原則だが、選手や指導者、さらに審判の見解としては180°以上開くことが暗黙の了解になっているのである。これでは、採点規則の必要性が見受けられないことになり、また、採点規則が新体操界に正しく浸透していないことが今日に見られる問題の原因といえる。

新体操は、そもそもリズムと体操を基盤に物語性のある演技として表現されるスポーツ種目である。この体操は、手具の操作と相まって実施されるところにその特徴が見出される。本来、採点規則集はこの基本的な考えを具現化し、その発展を促すための機能をも有していなければならないだろう。

現状の採点規則集を見る限り上記で示した過度な柔軟と難度判定の關係の欠陥を見過ごすことはできない。本論は、そうした問題を明らかにするとともに本来の新体操の在るべき姿について哲学的に考察をするものである。

2) 本論の方法

まず、新体操の採点規則のどの部分に欠陥があるのかを明確にし、それらの欠陥が何故生じているのかを哲学的に考察することが重要であろう。

したがって、本論では2009年版採点規則集を本論の中心に据えて前項で触れた問題点を明らかにし、それらの問題が新体操の本来あるべき姿とどのように喰い違っているのかを検討していくことになる。その場合、新体操のルーツやその歴史、さらには現状を無視することはできない故、それらを概観する必要がある。

また筆者は、自ら新体操選手としての経験もあることからそこでの経験知と先行文献から得た知を織り交ぜながら論を展開していくことになる。

なお、現状の新体操界では専門用語の概念規定が曖昧である故に混乱を招いている点も見逃せない。例えば、難度要素と技術の關係における混乱は即解決していかなければならないだろう。また、「スポーツは文化である」という根本的、かつ重要な命題をないがしろにしたままの問題解決は考えにくい。したがって、本論においてはこれらの問題を先ず整理した上で採点規則集の問題を明らかにしていきたい。

3) 先行研究の検討

新体操における研究の主流は、難度要素向上のための測定や比較検討などである。この領域では人文系の研究は少なく、特に哲学的視点から捉えたものは数少

ない。瀧澤³⁾が体操競技の難度について哲学的に検討を加えているが、ここでは特に男子体操競技を対象としていることから本論との違いは明らかである。

唯一、拙著⁴⁾を除いて新体操において哲学的に検討を加えた論文は村田の「新体操の採点規則に関する哲学的研究」⁵⁾である。ここでは、採点規則と新体操の競技性の關係について論じており、芸術性や難度要素にも触れているが、全体的には新体操の在るべき方向性を批判したもので、新体操の一要素である柔軟性に特化して論が進められたものではない。

2. 新体操について

新体操の歴史は徒手体操から始まっている。その徒手体操のルーツを辿ればギリシャ語の「ギムノス(gymnos)」⁶⁾や更には3000年以上前の古代ペルシャ時代の「ズールハーネ」⁷⁾に遡って考えることができる。つまり、体操はあらゆるスポーツ・パフォーマンスの原点ともいえる身体運動であるといっても過言ではない。換言すると、体操は健康を特化したものであり、今日にいう準備運動といえよう。

徒手体操は、手具を使わない体操(身体運動)の意味である。体操競技では、1960年代初頭まで現在の体操競技種目の一つである「ゆか」のことを徒手体操と呼んでいた⁸⁾。この「ゆか」での演技内容は男女とも手具を用いていない。

新体操は、国際体操連盟(以後、FIGと表記する)の一種別として1963年に初めて開催された世界選手権大会をもって正式に使われたことばである⁹⁾。この新体操は、体操競技の「ゆか」とその競技性において区別するために手具を用いて実施する体操、つまり手具体操としてのアイデンティティーを獲得したということになる。

上述のことから考えれば、新体操は体操という本来あるべき意味、つまり健康の維持・増進という理念から逸脱することは避けなければならない。特に現在問題になっている過度な柔軟は体操本来の在るべき姿(理念)から外れていることが明らかであろう。

このように、新体操は体操の一つとして発展を遂げたのである。そして、それはリズムを基盤とした体操であると特徴づけることができる。いわば、今日の新体操はそうしたリズム以上に過度な柔軟に注目が集まっていることで混乱を招いているのである。

3. 新体操の技術について

1) 技術とは何か

どのスポーツにおいても、個人の潜在的に保有する身体的素質や技術が高く評価されるものである。新体操においても同様であるが、ここでいわれる技術は並

外れた柔軟性と器具を器用に扱うことが条件とされている。具体的には、難度認定において開脚度が180°以上を求めることや、極端に腰を後方に曲げることである。この技術の向上が、即難度要素の評価に結び付くという短絡的な考えは、多くの新体操関係者に疑問を抱かせ、問題視されている¹⁰⁾。

問題は、技術という概念と演技全体を構成するところの難度要素のもつ意味が混同されたまま理解されているという点である。ちなみに、技術は何かを完成するための手段(方法、道具)の意味である¹¹⁾。したがって、ここでいう技術とは新体操というスポーツを完成させるための手段を意味していることになる。

もし、狭義において新体操が「演技全体を構成するところの難度要素」をもって意味づけられるならば、そこでの技術は各難度要素を完成させるための手段を意味することになる。例えば、「(足の)甲立ち」(E難度)を完成させるためのあらゆる手段(方法)は、技術そのものであるということである。現状の採点規則集を見る限りこの難度要素がE難度として成立するための条件は、正座状態から立ち上がり、瞬時の甲立ちになることである。

現状においてこの難度要素が問題視される点は、甲立ちに至ったときの身体の体勢である。つまり、現状では極度な後屈姿勢が見られないとE難度として認められないということである。これは、その一例に過ぎないが多くの難度要素は同じような判定がなされている。

上述したように、技術は難度要素を完成させるための手段であることから、難度要素の完成状態を明確にしておく必要がある。そこでは、より客観的な判断が必要となってくるであろう。なぜなら、難度は独立した要素であり、それらの組み合わせによって新体操の一演技ができるからである。つまり、新体操においてはこの点が曖昧であるといわざるを得ないだろう。

2) 新体操と文化の関係

前項で触れたように、技術とは何かを完成するための手段(方法、道具)を意味するものである。私たちは意識的、無意識的に日々を過ごしている。その日常における人の行為・行動はそれぞれ何を意図しているのでしょうか。筆者は、抽象的な表現ではあるがそれは「より豊かに生きる」ことを意図しているものであると認識している。その意味において、新体操も他のスポーツと同様、より豊かな人生を送るための手段であるといっても間違いではない。

人類が文化を築いてきたのは紛れもなく豊かな人生を送りたいがためであった。今日、「スポーツは文化である」といわれるまでになった。新体操もスポーツの

一つである。であれば、「新体操は文化である」といっても間違いではない。

新体操の歴史は、ドイツ体操やバレエなどの芸術的なものを経て、現在のかたちになったといわれている。この歴史を振り返るなら現状の新体操との差異がどこにどのように在るか一目瞭然である。一口でいうなら、現状のそれは極度にアクロバットの的であるといえるだろう。この傾向は、「新体操大国ロシア」¹²⁾の影響であることは容易に想像できる。

ロシアは新体操界の上位を常に維持し、その技術力は新体操界の先を見据えた発展を遂げている。さらに、その成果は目を見張るものがあり、世界中が教えを求め、ロシアで練習を重ねる選手が増加している¹³⁾。

本論において、ここまで進化を遂げた新体操が批判的にされるのは新体操が文化との関わりがあるからに他ならない。文化概念は、その語源(kultura=文化)の他、栽培、耕作などの意味がある。)が示すように人が豊かな人生を送ることの意味を有している。筆者が本論の冒頭で述べたように、新体操が高難度志向による過度な柔軟と難度判定の関係によって新体操関係者を悩ませているとするなら、新体操は文化とは言い難い。つまり、「新体操は文化である」という命題を成り立たせるためにも現状の新体操、具体的には採点規則を批判しなければならないということである。

3) まとめ

「スポーツは、社会的・歴史的な運動発展のなかで特に形態化された運動文化の一領域である」¹⁴⁾といわれている。スポーツはさまざまな形を得て進化を遂げていることになるが、そこにはそれぞれのスポーツの基盤になるものが存在している。つまり、スポーツの歴史を見失うことがあってはならないということである。その失ってはならないことの重要な一つに、スポーツが長い歴史の中で道徳的観念に導かれて今日に至っているという点を挙げることができる。

筆者は、「新体操はスポーツであり文化である」と、確信したい。そのためにはまず、スポーツは人が豊かな人生を送るための一つの手段であるべきだと考える。そして次に、新体操が豊かな人生を送るための一手段であるということが明確且つ正しいことばで伝達されていなければならない。具体的には、演技を評価するさまざまな要素が明確に、しかも分かりやすく説明され得るものでなければならない。

実際の新体操における採点場面ではそれらの要素に与えられた価値基準に沿って採点することになる。その重要な要素の一つに「難度」要素がある¹⁵⁾。新体操の世界では個々の演技要素のことを「難度」と呼んでいる。その理由は、演技は難度が繋がり合っ

作品と見なされるためである。この難度（演技要素）は採点要素として欠かせないものであることから、その形（フォーム）は人が見て心地良い程度に留めておく必要がある。なぜなら、人間は美しいものに美しいと感じることに心地良さを抱くからである。また、新体操はリズムと体操を特化したものであり、そこでは独創的な表現、いわば主観的なものが重要であることから、今日に見られる過度な柔軟は必要ないといえる。

4. 新体操における柔軟について

1) 「柔軟」の用語について

新体操は、英語表記で rhythmic gymnastics と示されているように、リズムを基盤とした体操である。しかし、今日の新体操は、柔軟性を用いた身体の難度、アクロバットの要素が重要視されている。新体操はこうした技術的（身体、手具の難度）要素を重視したことによって過度な柔軟性が要求され、採点規則で混乱を招いている¹⁶⁾。

その発端は、「新体操大国ロシア」¹⁷⁾の存在が大きいとされている。その特徴は、並外れた柔軟性を有する選手が多く在籍し、柔軟性が新体操界に新たな演技要素を生み出すこととなったのである。

「柔軟」は、「やわらかいこと。しなやかなこと」¹⁸⁾であるが、今日の新体操からは程遠いことばといえよう。言い換えると、柔軟は心地良さまを示し、過度な要素を取り込んだ新体操は本来あるべき「柔軟」の意味を示していないといえよう。いうならば、「柔軟」は「難度」の一要素であるにも関わらず、主観的な判断によって採点されていることが問題である。また、新体操と柔軟体操に差異がないことにもなり、今日の新体操は新体操としての本来性を見失っている状態なのである。

柔軟は新体操に関わらず、どのスポーツにも欠かせない要素である。それは、怪我を防ぐための手段という方が相応しい表現であろう。相撲でいうところの「股割」であり、これは鍛錬法の一つとされ、稽古中に必ず取り入れられている。つまり、スポーツでいう「柔軟」は「健康」がキーワードとされ、相互作用することが望ましいスポーツのかたちとも捉えられる。こうした点から見ても、今日の新体操の柔軟要素は問題といわざるを得ない状況におかれている。

新体操にとって柔軟はしなやかで美しい動きを表現するに相応しく、最大の特徴ともいえることから柔軟が及ぼす影響は大きい。よって、柔軟の表現方法については慎重でなければならないし、そこではその理想像を設定しなければならないだろう。そして、その理想的な表現が採点規則の中で客観的な評価基準として反映されなければならないのである。

2) 新体操の柔軟と過度な柔軟について

新体操の歴史を辿ると、新体操は徒手体操（手具を使わない体操）から始まっている。この徒手体操で柔軟は、しなやかな動きをつくるために必要な身体能力として捉えられていた。また、そこでは音楽を伴った動きを主体とした競技スポーツであったことも忘れてはならない。一方、新体操は徒手体操といわれた時代を経てモダン体操という視点で捉えられるようになったのである。更に、この歴史的変遷を体育（Physical Education）との関係でナショナルリズムとしても捉えられていたことを念頭に置くことが重要である¹⁹⁾。なぜなら、新体操は体操で求められてきた芸術的要素を重要視したからである。つまり、現在の新体操は採点規則に過度な柔軟を多く取り入れたことで問題が複雑化している²⁰⁾。

難度とは「むずかしさの程度」²¹⁾のことであり、この概念は主に体操競技で使用されたものであるが、後に新体操でも使われるようになった。つまり、難度ということばは演技要素に与えられた価値点のことを意味している。

新体操という難度は、ジャンプ・バランス・ピボット・柔軟の4項目から成り立っている。その難易度の度合いはFIG技術委員によって提案され、その上部会議体である理事会で決議される。技術委員会は、ルールの原案作成の他、その管理と国際審判員の養成という重要な課題も担っている。つまり、技術委員会は新体操の土台ともいえるルールを任されていることである。しかし、今日の新体操の難度は、想像を超えた柔軟性を持ち合わせていないと成立しない。いわば、過度な柔軟性が求められているということである。これは、FIGで定められたルールに問題があると言わざるを得ないであろう。

新体操と柔軟の関係は、必要不可欠な要素であることに間違いはない。よって、新体操が新体操として在るため、また柔軟が柔軟としての役割を果たすためにも柔軟の範囲を定めることが必要である。例えば、180°以上の開脚を認めないといったことである。また、スポーツをする最大の目的である「健康」を意識した規則でなくてはならないということである。

3) まとめ

現在の新体操は、過度な柔軟によって人間の極限を超える要素が演技の大半を占めている。それは、快い感覚を持つものではなく、むしろ恐怖や極度の緊張感をもたらすものである。更に、今日の新体操は過度な柔軟性を用いることから美しさの表現を妨げている。こうした現象の根源には採点規則における記述方法の問題がある。つまり、そのことによって誤った解釈が

導かれるという問題があるということである。

本来、採点規則はその競技の在り方を導く重要な役割を担っているはずだが、新体操の採点規則に記載されている難度要素の図（図1）そのものに美しさを感じとれないものが多く見受けられる。これは、新体操の競技性そのものをも脅かす問題ともいえる。さらには、柔軟として正しく記載されている要素が存在しようとも実際に行われている動作は、採点規則を超越した過度な形で表現され、実施されている。こうして採点規則を超越した形の動作が理想的な難度として捉えられてしまい、その身体表現が難度要素として認められてしまっているのが実情である。採点規則集に示されている個々の演技要素の図は、難度要素として認められる最低限度の課題を示している。しかし、実態はそれを超越してしまっていることから大会現場においては、規則で定められているはずの難度が格下げされた状態で評価されているという問題が起こっているのである。

新体操の採点の特徴は、芸術を評価することにある。そこでは、真に美しいと感じることが評価するうえで重要である。そして、その美しさを感じる要素こそ難度要素でなければならないのである。なぜなら、新体

操の演技は難度要素が連動して一つの作品がつくりあげられるからである。ようするに、現状の難度要素は新体操の全ての採点要素（難度、実施、芸術）において重大な役割を担っているのである。

こうしたことから、難度要素は美しいと思える形（フォーム）を採点規則に記載することが最も重要である。例えば、繰り返しになるが開脚度は180°までにするというように限度をもうけるということである。さらにそれらを判断するとき、形（フォーム）を完全に知った上で行うべきものであり、決して曖昧なものであってはならない。

ちなみに、新体操で宙返りのようなアクロバットの要素を禁じているのは、その意味からであるが、アクロバットとは宙に浮くものだけを示すことばではない。新体操はこうしたことばの過ちによって過度な柔軟をアクロバットの要素と判断できず、その動作が更に過剰化し、放置されたことで問題が生じたのである。

5. 結 論

人は皆、学ぶことにより豊かな人生を送っている。つまり、学ぶことは何かを達せさせるための手段（方法、道具）なのであろう。新体操も同様のことがいえ、

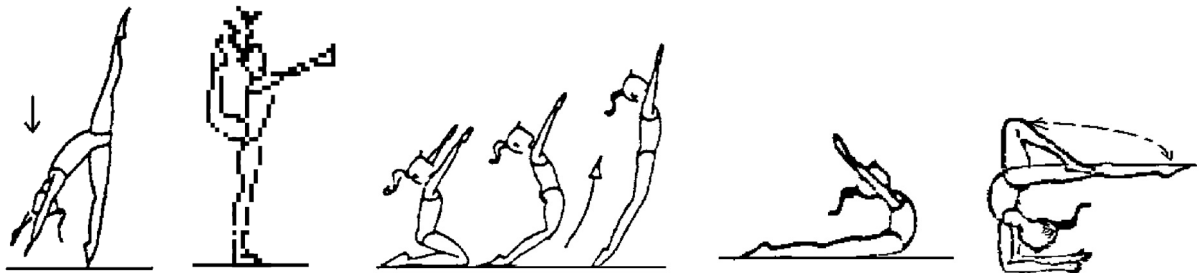


図1 <http://www.plus-blog.sportsnavi.com/jpngym/article/1102>



図2 <http://image-search.yahoo.co.jp/>

図1は『新体操採点規則 2009-2012』で記載されている柔軟要素の絵である。この形（フォーム）を図通りに実施することで難度点が加算される。今日の新体操は、図1の形（フォーム）に比べ、それ以上に開脚度や後屈度を大きく実施することが好ましいとされている。この点こそが、多くの新体操の専門家が指摘する問題点の一つである。その例として、図1で示している難度を試合で実施している写真を図2で示した。図1に比べて過度な柔軟であることは見ての通りであり、どちらが美しいかと問えば図1の方が身体の伸びやすさが伝わってくるように感じる。だが、図1の絵から美しさを感じ取りにくい要素も存在する。こうしたことから、再度採点規則に記載する絵（図1）を見直すとともに、実際に実施される形（フォーム）に制限を持つことが今後必要になってくる。そうでなければ、新体操は新体操関係者だけで行われることになり、スポーツとしての役割をも果せないことになろう。

新体操に親しむすべての人が豊かな人生を送るために新体操を行っていると考えられる。だからこそ、新体操が真に魅力あるスポーツであることが重要になってくるであろう。

これまでの考察で新体操は豊かな人生を送るための手段であるという観点に立った場合、そこではいくつかの問題が明らかにされた。その一つが採点規則における過度な柔軟性の要求の問題である。筆者は、そうした問題に大きく関わることばに「客観性」と「主観性」を挙げることにする。なぜなら、確かな形（フォーム）の正確性を評価の対象とする難度に対し、確かな形が存在しない芸術といった対照的な採点項目によって新体操は評価されていることからである。よって、「客観性」「主観性」のことばの定義をもって新体操の評価方法を導き出し、今日の新体操の問題である採点規則の過ちを正すことが極めて重要であると考えられる。

客観性とは、「特定の個人的主観の考えや評価から独立して、普遍性をもっていること」²²⁾であり、新体操でいうところの採点規則集作成の際に必要なことばである。いうならば、新体操は客観的な判断によって採点規則が作成されることによって、平等且つ健康的な競技スポーツになるといえる。これは、スポーツのもつ本来の姿であり、今日の競技スポーツにも反映させなければならない事項である。

主観的とは、「①主観による価値を第一に重んじるさま。主観に基づくさま。②俗に、自分ひとりの考えや感じ方にかたよる態度であること」²³⁾であり、独自の持つ感性を活かすこととも捉えられよう。つまり、新体操でいうところの芸術を評価するとき、主観的に判断されるのが良いと示唆する。なぜなら、新体操は身体の難度要素であるジャンプ、バランス、ピボット、柔軟や手具の難度要素が組み合わさって一つの作品として評価されるからである。それらは、決められた動作であるため客観的な判断が求められる。しかし、芸術については決められた動作がないため、難度要素の出来によって判断されるべきではないと考えている。さらに、難度要素の難しさによって芸術が評価されるのであれば、芸術項目の意味を持っていないということになる。

筆者の考える新体操の理想は、客観的な採点規則集の作成に伴い、採点項目の難度と実施は客観的に、芸術は主観的に評価されるべきであると思料する。そのことに関連して混乱を招いている重大な要因の一つが過度な柔軟の存在であるといつてもよいだろう。そして、そのことによって採点項目のすべてにおいて被害を蒙っているといつても過言ではない。換言すると、過度な柔軟性を廃止することで新体操は、そこに関わる全ての人にとって彼らが豊かな人生を送るための手段

になり得るのである。

新体操は今やスポーツの重要な一種別であり、同時に文化である。また、スポーツは幅広い年代において見る・するスポーツとして愛されるべきであることから、現 FIG 会長が自ら指摘するように「正義を無視したスポーツ」「教育を無視したスポーツ」であってはならない²⁴⁾。つまり、今日の新体操のルールは新体操の根源を無視した結果、複雑化し新体操関係者、そして勿論のこと一般人に好まれなくなったことが問題なのである。そして、そのことにより健康を無視した過度な柔軟が生まれたのであろう。

6. 参考文献一覧

- 1) 浦谷郁子「新体操における美の理論に関する一考察—採点規則との関係において—」『日本体育大学紀要』第 40 巻第 2 号, 日本体育大学, 2011, pp. 57-68
- 2) 新体操委員会『2009-2012 年採点規則新体操女子』日本体操協会, 2010, p. 62
- 3) 瀧澤康二「体操競技の難度に関する哲学的検討」『日本体育大学紀要』第 28 巻第 2 号, 日本体育大学, 1999, pp. 107-114
- 4) 浦谷郁子「新体操における美の理論に関する一考察—採点規則との関係において—」『日本体育大学紀要』第 40 巻第 2 号, 日本体育大学, 2011, pp. 57-68
- 5) 村田由香里「新体操の採点規則に関する哲学的研究」『日本体育大学紀要』第 41 巻第 1 号, 日本体育大学, 2011, pp. 13-24
- 6) 古川晴風『ギリシャ語辞典』大学書林, 1997, p. 233
- 7) 『Sport of Pahlavany and Zurkhanehee』 p. 2
- 8) 「日本体操協会」2003, <http://www.jpn-gym.or.jp/>
- 9) 『STATUTES EDITION 2007』国際体操連盟 (FIG), 2007
- 10) 『新体操技術委員会報告書』国際体操連盟 (FIG), 2009
- 11) 下中 弘『哲学辞典』平凡社, 1995, p. 301
- 12) 水野裕子「新体操大国ロシア」『ユーラシア研究』第 36 号, ユーラシア研究所, 2007, pp. 38-42
- 13) 韓国のソン・ヨンジェは、現在ロシアを拠点に練習を積んでいる。その結果であろうか、2010 年世界選手権で 32 位 (個人総合 98.625 点) から 1 年間で 2011 年世界選手権 11 位 (決勝成績・個人総合 107.750 点) に入るほど成長した。その他にも多くの国がロシアを拠点に練習し、上位に君臨しつつある。団体でいうと日本のフェアリー POLA が 2010 年からロシアを拠点に、ロシア人コーチのもと強化を行っている。
- 14) 滝沢康二「スポーツ競技団体の組織機構に関する検討—国際体操連盟 (FIG) の場合を中心に—」『日本体育大学紀要』第 32 巻第 2 号, 日本体育大学, 2003, pp. 81-90
- 15) 滝沢康二「体操競技の難度に関する哲学的検討」『日本体育大学紀要』第 28 巻第 2 号, 日本体育大学, 1999, p. 107-114
- 16) 2009 年世界新体操選手権大会において、芸術性に定評の高いアンナ・ベツソワ選手の演技終了後、観客から「ベツソワ選手のコール」が起きた。しかし、演技の出来に対して点数、順位が思ったより伸

浦谷

- びず、ブーイングが発生した。
- 17) 水野裕子「新体操大国ロシア」『ユーラシア研究』第36号, ユーラシア研究所, 2007, pp. 38-42
 - 18) 新村出編『広辞苑』岩波書店, 1998, p. 1264
 - 19) 高橋健夫『楽しい体育の創造』大修館書店, 1986, pp. 31-35
 - 20) 2009年世界新体操選手権大会において, 芸術性に定評の高いアンナ・ベッソノワ選手の演技終了後, 観客から「ベッソノワ選手のコール」が起きた。しかし, 演技の出来に対して点数, 順位が思ったより伸びず, ブーイングが発生した。
 - 21) 新村出編『広辞苑』岩波書店, 1991, p. 1338
 - 22) 新村出編, 同上書, p. 673
 - 23) 新村出編, 同上書, p. 1272
 - 24) 第43回世界体操競技選手権・東京大会終了後, 日本体育大学にてFIG会長ブルーノ・グランディの講演会が実施された(10月17日)。

〈連絡先〉

著者名：浦谷郁子

住 所：東京都世田谷区深沢 7-1-1

所 属：体育原理研究室

E-mail アドレス：ikuko_u5ikuko_u5@yahoo.co.jp